

沖

俳句雑誌[おき]

12月号

沖 発行所

千葉都民

苔の弾力

能村 研三

私の住む市川市は東京駅に三十分
足らずで行くことが出来る。それに
比べて千葉県の県庁所在地である千
葉市にはもう少し時間がかかる。電
車賃も東京駅に行く方が安い。

そんなことから、市川市に住む
人はよく千葉都民と言われた。千葉
県に居住しながらも仕事や生活の基
本を東京に置いて夜だけ千葉に帰っ
てくる。従って市川市のことや千葉
県のことには関心がないという訳な
のだ。

先師登四郎は、市川に六十年以上
居住したが、本籍は東京に置いたま
まで、亡くなるまで東京人としての
強い意識を持っていた。こんな事を
言ったら千葉の人に怒られるかも知
れないが、「沖」の誌面作りに対し
ても常々「千葉の雑誌にしてはいけ
ない。洗練された東京の雑誌にしな
ければいけない」と言い続けてきた。
先師も、教師としての仕事の場合は
市川にあったものの、千葉で行われ

新潟・湯田上温泉

町の名に「湯」の名冠して虫の宿

澄む秋の竹林立の斜へかな

爽涼や地蔵堂裏の作務道具

つなぎ樞実をつなぎむと伏せ走り

これよりは禁葷酒なり式部の実
蜻蛉来て椎茸櫛の廃れあり
整理下手直らず釣瓶落しかな
走り根に苔の弾力木の実降る
掌の中に胡桃書き順辿りをり
路地間口狭きがよけれ菊月夜

る俳句の会合にも殆ど出たことがなく、完璧な東京志向、中央志向を貫いた。

ところが、私の場合は生まれも育ちも仕事場も市川にあつたことから、先師の東京志向を受け継ぐことが出来なかつた。地元への愛着も感じ、千葉での俳句の仕事にも積極的に参加している。

「沖」の新年会も以前は東京で開催してきた。これも東京、中央の雑誌であると言議が強かつたからで、途中先師が高齢となり、負担を軽減するために市川で開催するようになった。中央例会も東京で開催していたが、いつからか市川で開催するようになった。

親子の間で、地域への思いがこんなにも違うのかと思うこともあるが、千葉県の俳壇での活動も重視しつつ、先師がこたわつた東京そして中央への思いも大切にしながらはならないと思う。

能村 研三

蒼茫集



出航す

遠藤真砂明

ボーイジャー一号

北川英子

露の世のはなやかに大朝日かな
灯台に朝日慈母観音の秋
太平洋明けて根釣の一人立
海といふ大きな秋へ出航す
長き夜を全部眠つてしまひけり
台風来あらがふ波を打ち崩し

三世代揃ひ良夜の喉ぼとけ
十六夜のやつぱり今日も言はずじまひ
竜淵に潜みボーイジャー何処へ行く
晩秋の高渡る風鯖街道
秋麗へきらきら宇宙散骨球
卒寿にも淡き脚光後の月

猪を撃つ

菅谷たけし

答へけり

辻美奈子

秋夕焼SFめける硝子都市
雨戸閉むしかと良夜を記憶して
人間の匂ひ消えたる月の道
月光やさびしきときは肌さすり
秋没日影は足長・手長の囀
性格は温厚にして猪を撃つ

小鳥来てゐるかと問へり答へけり
神留守の素焼の肌のうすじめり
いまそこにむかしの闇が鉦叩
四十代過ぐ秋冷の爪ひかり
露の夜を纏ひて猫の帰りくる
地震走りけり月光の降りやまず

悪友 林昭太郎

悪友の悪友は吾ぬのこづち
問診票秋思の項は無かりけり
熟柿落つ空の青さに耐へかねて
炊飯器噴きをり台風来つつあり
石榴裂け空に瑕瑾の無かりけり
出入りの分だけ空けて懸大根

土を割る音 甲州千草

菊を干す朝日豊かな母の郷
張板の寝かされしまま赤のまま
釣瓶落し長短針の影持たず
集中の途切れをつなぐ虫時雨
菊干場暮れてほのかな香を残す
夜は土を割る音あらむ茸山

密やかに 宮内とし子

密やかに始まるボレロ月天心
秋の風水辺は人の佇つところ

沢音を残して霧の白世界
人肌といふはやさしき月見酒
釣瓶落し坂の上なる異人墓地
埒もなく釣舟を見て秋惜しむ
をとこ某 千田百里

誰も空を見てをり秋の聖橋
ふと秋思かすり傷にも包帯し
酌み交すをとこ某あて良夜
痛きほど月を浴び来て湯浴むなり
乾ぶ音からぶ香を立て稲架襖
花野まで一里父母の世へ万里

単色 久染康子

釣瓶落しすとんと景色単色に
威すには添水の水量不足かな
雁渡る軒に干さるる水枕
ヨーヨーの水ひやひやと秋まつり
櫓田の実直な列羽越線
地ことばに通訳付きの芋煮会

口笛吹けば 千田 敬

名月を流れに乗せて水分石
紅葉山雄ごころ佇ちの松も誉め
秋澄めるもののひとつの能登瓦
又三郎が口笛吹けば山粧ふ
飛びとびの話も絆秋扇
咀嚼音重ねて家族秋ともし

天動説 細川洋子

造影の注射しんしんしぐるるよ
天動説信じたくなる花野かな
失ひしままの嗅覚鱗雲
指をもて拵げる文字や水の秋
残菊や少し掠れし蔵書印
火恋し猪突猛進身上に

きのこ村 頓所友枝

コスモスや忘れ易きは生き易し
曼珠沙華出会ひはいつもサプライズ

滝音を袱紗包に山粧ふ

「すぐそこ」の滅法遠ききのこ村
六十路かな金木犀は夕日色
朝顔の種採りて待つ再検査

秋昼寝 大畑善昭

蟪蛄の産卵中の白あぶく
篝火に鼻孔哀しき鹿踊
やはりすつきりたまさかの秋昼寝
穴感躑ぎ来る猫を尾で怒り
林相を看着的中の茸狩
愛を告ぐときめきに似て秋澄む日

大矩形 上谷昌憲

百万本咲けど香らぬ曼珠沙華
秋日濃し玉子焼屋に人群れて
駅の上に駅の重なる葛嵐
聖イグナチオの晩鐘葛嵐
爽やかや水嘯んで舟遡る
列車行く四方稔田の大矩形

鳥語 田所節子

木に鳥語ざわめく釣瓶落しかな
みなどどこか恙のありて新走り
十六夜や歩かうかてふ夫に蹤き
喫煙所どこか檻めく秋の暮
洗ひたる箒吊しおく白露かな
結論は夜食のあとのこととせり

鯖鮎 森岡正作

鯖鮎の修羅を美味しと戴けり
手庇に佐渡を窺ふ稲架日和
十字架のやうに案山子を負ひ帰り
銅賞の案山子は笑ひ上戸なり
牛乳のいよいよ甘く秋澄めり
去りがての言葉の重し鱗雲

北半球 望月晴美

孤高とは白曼珠沙華かもしれず
満月の嘘いつはりのなきひかり

満月や北半球に住み慣れて
登頂に石ひとつ積む秋日和
一戸づつ紅葉囲ひの合掌家
掬ひ上ぐ秋潮に色なかりけり

長幼 秋葉雅治

十月や日時計に陽の赫奕と
おのづから長幼の序や菊の酒
高みつつ方位定まる鷹柱
斬れさうな秋水に垂れ竿いっぽん
傷つけて真珠宿らす秋思かな
唐詩掲げ秋風とほる室籠り

瘤のある木 松井志津子

暮れ方のひかり纏ひて吾亦紅
明るきへ水音いそぐ山葡萄
冬隣瘤のある木もすぐな木も
丹念に揚舟洗ふ帰燕かな
波の磨ぐ流木白し鳥渡る
荒海の暮るるに間なし水頭鱧

潮鳴集



秋 七種年男

仮分数 柴田近江

瀬戸の秋坂あがるたび島増えて
悲話語る如く近江のこぼれ萩
磔像に欠伸かくして秋扇
秋風やつんと仁王の固き顎
飛驒牛乳瓶に挿されて吾亦紅

砂 嵐 内山花葉

銀河濃しむかしテレビに砂嵐
満月のとろりと蜜のひかりかな
脱げさうな嬰のくつした秋日和
霜降の星へひびけり連結音
電源を切つて夜長を終りとす

添水鳴る風に読点打つやうに
古酒酌むや一言居士のつむり寄せ
柘榴笑む負けず嫌ひがまたすねて
もたれあひたる鶏頭の仮分数
賢治忌の碓星さす飛行灯

精養軒へ 福島茂

道草の理由は問はずねこじやらし
小鳥来る望遠鏡の輪の中に
鳳仙花遊び心は衰へず
寄席跳ねて精養軒へ文化の日
夕闇に魔除けのやうな吊し柿

沖作品



能村研三選

ちぎれ雲やがて一つに獺祭忌

新潟

菅井 悦子

稲架高しみごと五頭嶺に對峙せり

履き馴れし靴にコスモス日和かな

昼の虫座禅組みたる日をおもふ

闕伽桶の並び干されて式部の実

絵手紙のはしより零れ赤のまま

一雨去り渾身の色鶏頭花

実柘榴や命ぎつしり抱きしめて

梨畑撫でて荒して野分かな

丹精を全開にして菊花展

性格は少年のまま木の実独楽

残響の風に乗りくる威し銃

月餅の餡のくさぐさ月今宵

獺祭忌またもや新聞休刊日

産土の杜の抜け道夕かなかな

市川

板橋 昭子

塙 誠一郎

湯上りの木綿古りけり涼新た

石一つ一つに影す月明り

忘れたきことは忘れて秋の海

秋夕焼一樹ふくらむ鳥の声

電線にかかる夕月楽譜めく

爽やかや裾野の街は雲の下

万葉の紫匂ふ桔梗かな

建売の同形同色天高し

口寄せて信濃を啜る新走

秋暑しカーブミラーに歪む街

池の辺へ小径の岐かれ草の花

甲乙のつけがたき菜を間引きけり

三山のよき距りや鳥渡る

秋天へジーンズ叩きのばしけり

早池峰の秋風囁んで獅子が舞ふ

大分

堀 園子

千葉

神戸やすを

岩手

高橋 和枝

沖作品 15句選評

*
能村研

ちぎれ雲やがて一つに獺祭忌 菅井 悦子

雄大なスケールの大きな句で司馬遼太郎の「坂の上の雲」を想起させた。ちぎれ雲は別名野分け雲ともいい、高層雲、乱層雲、積乱雲の雲底に風でちぎれたような雲が流れている状態で、白っぽいちぎれ雲が飛び交うと悪天候となる兆しとも思える。獺祭忌は正岡子規の忌日で九月十九日。正にこの頃は野分の季節。天候も中々定まらない頃である。子規は俳句の中興の祖でもあり、この「一つに」の思いには子規の思いも反映されている。

実石榴や命ぎつしり抱きしめて 板橋 昭子

板橋さんは市川で梨を作っている方なので、実石榴のような収穫物に対しての眼差しがあたたかい。石榴は仏教の世界では鬼子母神が人の子を捕まえて食べていたのを見かねた釈迦が、

仏法に帰依せしめ守護神とし、子供と安産の守り神とした。また遠くイランでは、石榴がたくさん採れることもあって古代ペルシャ時代から命の果実と呼ばれ、美容や健康維持に珍重されてきた。口の開いた石榴から溢れ出る実をいのちがぎつしり詰まっていると感じた。

獺祭忌 またもや新聞休刊日 埴 誠一郎

正岡子規は大学中退後、叔父の紹介で新聞「日本」の記者となり、家族を呼び寄せそこを文芸活動の拠点としたことは有名である。子規のころの新聞はどの位休刊日があったかは知らないが、昔の新聞休刊日は正月くらいしか無かった。いつのまにか少しずつ増えていって、今ではなんと、毎月休刊日がある。現在のジャーナリズムは新聞に頼らなくても、テレビやインターネットなどいろいろな手段でニュースが配信されるが、新聞が無いと思うと何となくさびしい気がする。

石 一つ一つに影す月明り 堀 園子

堀さんは大分の国東の人。先日九州大会が終わった後、有志と国東の先師登四郎の〈国東や枯れていづくも仏みち〉の句碑を訪ねた。国東はまさに仏みちとして随所に磨崖仏が掘られ、石仏が置かれている。月明かりの中、石の一つ一つは仏でもあり信仰の対象でもある。(以下略)